

元飛鳥船長が、皆様の「質問」にお答えします。  
Q・ミッドウエー環礁で  
見たもの

船乗りである私は海が大好きです。世界中の美しい海を見て、何度も魅了されました。希望や安らぎをもたらしたのは風のない海、不屈の精神や負けじ魂を育ててくれたのは嵐の海でした。

温室効果ガスによる地球温暖化、プラスチックによる海洋汚染が話題になる昨今ですが、海が好きなのに、綺麗な海を守らなければいけない人は人一倍です。

地球の海が汚染され、クルーズと宇宙空間を宇宙船で旅すると言わない、そんな事にはなつて貰いたくありません。宇宙をクルーズする時代になつてもシャトルの窓から青い綺麗な水の惑星地球を眺めたいものであり、水の惑星地球の海を航くクルーズは何時までも人々の楽しみであつて欲しいと考えます。

一言に海洋ゴミといっても、海岸に



ミッドウエー環礁の漂流ゴミ

打ち上げられるのが漂着ゴミ、海面や海中を漂っているのが漂流ゴミ、海底に堆積するのが海底ゴミと分類されます。

その中で、今一番問題になつているのは、海を漂っている海流中のゴミだと言われています。世界の海洋学者によると、海の漂流ゴミは数百万平方キロの広大な範囲にちらばつているとされています。漂流ゴミの大部分は自然力(日光や波)により分解



飛鳥とミッドウエー環礁 撮影者:中村康夫氏

されたプラスチックで、最終的にはマイクロプラスチックという米粒以下のプラスチックとなり魚や海洋生物の体内に堆積。結果として、自然生態に影響を及ぼし、やがては魚を食べる人間にも影響を及ぼす恐れはあると考えられています。

世界中の海洋学者や環境保護の団体が海洋汚染についての警告を発信しており、多くの国家機構も海洋汚染対策に乗り出していますが、将来予測は厳しいものばかりです。ナショナル・ジオグラフィックの記事によると、オーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)の憂慮すべき統計データとして、「生産される地球上のプラスチックの量は10年で倍増している」と有ります。また、紙のリサイクル率は58%、鉄鋼のリサイクル率は90%ですがプラスチックのそれは僅か14%だそうで、プラスチック

クは86%がゴミとして放棄され最終的には海に流れ出ると言う恐ろしい数値が示されています。10年ごとに海洋に流れ出るプラスチックゴミは倍増していると言っています。

世界を漂うゴミの量は様々な数値が推測されていますが、50万トンから2億トンまでの数値があり、正確な数値は掴めていないのしょうが膨大な量であることには間違いないと考えます。

私は研究者では有りませんが、船乗りとして海上に居ることが多い生活をしてみました。素人の目でも感覚ですが、自分の見た海の中で一番気掛かりだったのは、海を漂うプラスチックや発泡スチロール、ビニール袋です。

的にその量は増加していると感じます。

日本の沿岸も彼方此方の海岸で漂着したプラスチック類が散見されます。夏なのに雪が降った様な海岸、発泡スチロールの残骸が流れ着いているのです。潮流の関係で、堆積する場所には溜つてしまうのでしょうか。

リゾート地や観光名所の海岸では、商業的にまたはボランティア活動による清掃で美観が保たれています。一方で、人手の入りにくい海岸線では、漂流するゴミで汚された岩場や砂浜が散見されます。

世界の海を周って一番衝撃的だったのは、幸運にも入港できたミッドウエー環礁に漂着するプラスチック製品でした。そこに流れ着くその量



ハワイアンスピンドルフィン

ハワイアンモンクシール

と、生息する生き物に与える影響に息を呑みました。

別世界のように美しい青い海と白い砂浜、海岸には絶滅危惧種の唯一の在来哺乳動物ハワイアンモンクシール(ハワイ固有のアザラシ)がのんびりと寝そべり、海にはこれも絶滅が危惧されている、アオウミガメやハワイアンハシナガイルカが泳いでいます。環礁内の陸地は小アホウドリのサンクチュアリ(聖域)で、約80万羽がここで子育てをします。白アジサシや熱帯赤尾鳥、ゲンカン鳥で溢れています。海鳥17種類、渡り鳥約50種、加えて外来の鳥2種(カナリアが繁殖しています)。まさに生き物たちの楽園です。

海洋ゴミのほとんどは太平洋、大西洋、インド洋の無風帯に集まっています。そのなかの一つとしてよく知られているのが、北太平洋ゴミベルトです。ミッドウエー環礁はまさにこのベルト帯の中に位置しています。

環礁に流れ着く漂流ゴミは年間20トン余りになり、孤立した環境下で処理する費用は莫大と聞いています。

同環礁自然保護のレンジャーが案内してくれるイースター島のエコツアーでは、食品チューブのキャップや使



小アホウ鳥の群れ

小アホウ鳥の死骸

い捨てライター等々沢山のプラスチック製品を飲み込んで死んでしまったアホウドリの雛の無残な死骸、胃に残るプラスチック類を見せてくれます。漂流ゴミが環礁内の生態系に及ぼす無残な現実を見せ付けられた事は強烈な記憶となりました。

この景色に直面すると、ゴミを作らない事が大切とつくづく感じます。ゴミ対策には科学的な手法や法的な対策等々存在しますが、世界の海洋学者らが支持するローテクで現実的な解決策は、ゴミを捨てないよに世界中の人々を説得することだそうす。

海洋ゴミのほとんどがペットボトルとプラスチック容器だそうで、前述

のCSIROの科学者ウイルクック氏は「すべてのゴミは一度は人の手に渡つたもので、ゴミ対策の核心はこうしたものを捨てさせない動機を人々に与えることだ。最もシンプルで費用が掛からず、何より最も効果的に問題を解決できる。」と述べています。

この綺麗な水の惑星を、海を大切に守つて行くのは我々一人ひとりの問題意識です。プラスチックゴミを出さないためにまず、使わないことを徹底しましょう。

便利で安価だからと言ってプラスチック製のストロー、食器、お皿、カップ、スプーン、フォークは使わないようにしましょう。

商店やスーパーマーケットで簡単に手渡されるビニール袋を便利だからと言って使うのはやめましょう。商品は紙で包んで紙袋やマイバックに、容器のキャップは器から外れないように、使い捨てのライターは使用しないようにしたいものです。そんな出来ることを一人ひとりが始めることで、プラスチックゴミを地球上に放出しないようにしましょう。

一年にわたりエッセイを担当させて頂きました。纏まらない文章にお付き合い頂き有難う御座いました。

幡野 保裕

アスカクラブ 現会長



1944年 北京生まれ。東京、横浜で幼少時代を過ごし、その後東京商船大学卒業後、'68年日本郵船(株)へ入社。1995年6月より2003年3月まで飛鳥船長を務める。その間、4回の世界一周クルーズを指揮した。2003年6月郵船クルーズ常務取締役。2005年4月郵船クルーズ専務取締役。2009年7月アスカクラブ会長。2010年4月郵船クルーズ顧問。2011年3月郵船クルーズ退任。